AIN SHAMS UNIVERSITY

AIN SHAMS UNIVERSITY
مركز بحوث الشرق الأوسط
MIDDLE EAST RESEARCH CENTER
MERC

Middle East Research Journal

Refereed Scientific Journal (Accredited) Monthly

Vol. 93
November 2023

Issued by
Middle East
Research Center

Forty-ninth Year
Founded in 1974

Issn: 2536 - 9504
Online Issn: 2735 - 5233

近代日本から生まれた芥川龍之介の短編小説

—その文学作品にみられる葛藤及び心理変化—

Ryūnosuke Akutagawa's Short Stories in Modern Japan

«A study on conflict and psychological change in his literary works»

قصص ريونوسيكيه أكوتاغاوا القصيرة في اليابان الحديثة

«دراسة حول الصراع والتغير النفسي في أعمال الكاتب»

مى سعد أحمد حجازي

مدرس مساعد بقسم اللغة اليابانية

كلية الألسن - جامعة عين شمس

Mai Saad Ahmed Hegazy

Assistant Lecturer at Ain Shams University

Faculty of Languages (Al-Alsun), Japanese Language Department

Mai.Saad_Japanese@alsun.asu.edu.eg

www.mercj.journals.ekb.eg

الملخص:

يهدف هذا البحث إلى تسليط الضوء على أدب ريونوسيكيه أكوتاغوا ، إذ إنه يعد أحد أهم الأدباء في تاريخ الأدب الياباني الحديث. يقوم البحث بالتركيز على ملامح الصراع والتغير النفسي في أعمال الأديب ،حيث يتناول البحث كيف تطورت رؤية الأديب وتصويره للمجتمع الياباني على مدار أعماله والمتغيرات التي ساعدت على ذلك. يعرض البحث البيئة التي نشأ فيها الكاتب على الصعيد الشخصي والتاريخي، وما تعرض له من تغييرات واضطرابات على مدار حياته ومسيرته الأدبية. أوضح البحث الحقبة الزمنية التي عاصرها الكاتب، والتي كانت تعج بالعديد من الأحداث المهمة على كافة الأصعدة وتميزت بالانفتاح على الغرب، وهو انفتاح لم تصل إلى مثيله اليابان. ثم عرض البحث حياة الكتاب الشخصية منذ طفولته وما مر به من الاضطرابات داخل عائلته والذي كان له الأثر لاحقًا في سمة التناقض في أعمال الأديب. ويلاحظ اختلاف سمات أعمال الأديب على مدار مراحل إبداعه الأدبية، حيث مر بالعديد من التغيرات الفكرية والنفسية خلال مسيرته. ولكن يلاحظ أن القاسم المشترك في معظم أعماله هو التحول والتغير النفسي للشخصيات الرئيسية والذي من خلاله ينعكس الصراع الذي يعانيه الكاتب على المستوى الشخصي والصراع الدائم الذي يعانيه الياباني الحديث والمعاصر على المستوي العام.

الكلمات الدالة : ريونوسيكيه أكوتاغوا ، التغير النفسي، الصراع ،الحداثة ، عصر تايشو

Abstract:

Ryūnosuke Akutagawa is one of the greatest writers in Japanese modern literature. Previous studies have discussed his personal life, while other studies showed the era he lived and its influence on his works. However, the number of the studies linking between both the writer's personal and social environment with the changes of his literary works through the years is still not enough. Therefore, the researcher decided to track the changes in Ryūnosuke's literary work, along with analysing both his personal and social –historical environment.

The study concluded that Ryūnosuke's both personal and social environment had many conflicts and contradictions which influenced his works. By portraying the conflict in his works in different styles and motives, he has portrayed how modern Japanese society has been suffering. It is noticeable that a psychological change is a common point between most of his main characters in the stories. We can say that psychological change of the characters was also a reflection for Ryūnosuke's self-psychological change during his life.

Key words : Ryūnosuke Akutagawa, Taisho era, conflict, psychological change, Modernization

概要:

本研究は近代の小説家、芥川龍之介とその文学 を対象にしている。先行研究によると芥川の多くの作品では、孤独、エゴイズム、葛藤など人間の複雑な心を克明に描写されているとわかった。 注目されるのは、彼の作品のスタイルとモチーフは時代や社会の変化と共に変化していくということである。そのため、芥川が生きた環境を明らかにし、年代を考察しながら、芥川の作品は生涯と時代背景からどんな影響を受けていたか論じる。

芥川の多くの作品では、共通点は、登場人物の心理変化が見られる一方、相違点は心理変化の傾向である。登場人物の心理の変化は芥川の心理の変化を表している。年代を追って考察しながら、人間心理の描き方は初期の作品から晩年の作品は変わり、モチーフも異なっていくとわかる。これは、彼が子供のころから生きた環境および、混乱した社会・時代で人生を送ったためだと言える。そして、その作品における心理変化は登場人物の心の中にある葛藤によるものとして見られる。すなわち、この心理変化は近代日本人の心理的な葛藤と悩みを描写している。

キーワード：芥川龍之介 近代化　大正期　葛藤　心理変化

はじめに

芥川龍之介は大正時代（1912年～1926年）を代表する作家である。大正時代と言えば、他の日本の時代と比べると短いが、非常に大切な出来事が起こっている。大正時代では政府や経済に様々な変化があったことだけではなく、日本人の思考、文化、社会、生活も非常に変わった。たとえば、近代化と西洋化の傾向が強くなり、明治維新の影響は大正時代まで続き、全国に広がった。つまり、明治時代に起こった文明開化は大正時代になると、民衆化になった。それで、本研究では芥川が生きた環境と彼の文学に与えた影響について研究する。まず、彼が生きた時代と社会の影響について述べる。そして、芥川の生涯を通して子供の頃からの経験がどのように彼の作品

に影響を与えたか論じる。最後に、この環境から生まれた彼の文学の特徴及びその文学作品における葛藤と心理変化も明らかにする。

先行研究と問題設定:

芥川の文学に関する研究は多くあり、関口 安義、吉田精一、森本修などによって、芥川とその作品に関する研究が非常に注目されている。例えば、関口 安義（1992）は「芥川龍之介—闘いの生涯」で芥川が子供の頃を焦点し、その時から生きた葛藤などを明らかにした。そして、関口（1999）は「芥川龍之介とその時代」でも芥川が生きた社会背景などを論じている一方、彼が生きた時代背景にまだ明らかにしなかったところがあるため、その時代背景の様々な側面から再考する必要があると考えられる。また、2001 年の関口氏の「転換期の芥川龍之介」では、芥川は愛憎矛盾や闘いなどという易々と解決できないテーマについて書いていたと指摘した。

芥川の作品と言えば、初期、中期、晩年の三つの期間に分けているということである。初期から晩年にかけて作品の変遷が注目されている。田村（2003）は『芥川龍之介青春の軌跡　イゴイズムをはなれた愛』で『羅生門』『偸盗』『鼻』『蜘蛛の糸』『地獄変』『奉教人の死』の5つ作品を中心にした。この5つの作品を通して、芥川の初期の作品から中期の作品まで如何に変化したか明らかにした。また、先行研究によると、芥川の作品は近代社会を描写しており、葛藤や不安も描いたと明らかにした。例えば、奈保子高橋と奈保子大庭（2007）によれば、明治の開国以来、芥川などの文学者は、和漢の教養に洋の文化が混淆して大きく変容し、「近代文人」という新たな概念が成立したと述べた。そして、長行司（2010）によれば、芥川は不安に苦しみ、そこから脱却するために愛を求め続けた。これは生の欲動の顕現としての愛である。人は、生の欲動と死の欲動の葛藤、「生きるとは何か」、そのことについて芥川が考えたとき、「生きるとは『愛の探求』である」と結論づけるかもしれない。

そのため、中村(2015) の『芥川龍之介の世界』によれば、前・中期の歴史小説で芥川は自己の感情の表出を避け、日常的現実から全く遠ざかった過去に題材を求めると思われ、芥川にとって過去というのは夢の一形式であり、現実逃避の傾向が強くなったと見られる。また、奥田（2017）の「芥川龍之介文芸研究 : 芥川文芸における「闘い」をめぐって」では、晩年の作品群に至る過程によって、芥川文芸の転換の方向性を明らかにし、この時期の芥川文芸を人間凝視の態度の確立のための自己凝視の営為だったと結論した。

また、李 碩（2017）は内容よりも小説の形式に細心の注意を払っていたが、形式というのは文体や語りではなく、小説の構造を意味すると指摘し、芥川小説の構造と時代変化の関係を明らかにする。一方、高 啓 豪(2018)は芥川龍之介が作品と時代との同時性に苦心していたが、モダニストの立場を保持する姿が認められると指摘した。また、落合　修平(2020)によると、芥川作品の意図と達成を扱う先行研究は、時に明示的に、時に暗黙裡に参照され続けてきたが、芥川の文芸観については、同時代から今日まで、数多い誤解と無理解とに曝され続けていると述べている。そのため、初期から晩年にかけての時期における文芸観の表明や同時代との関わりを踏まえながら、芥川作品の意図と達成を問い直すことが必要である。

以上をまとめると、芥川作品のスタイルとモチーフは時代や社会の変化と共に変化していくということがわかった。そのため、芥川が生きた環境を明らかにし、年代を考察しながら、作品は生涯と時代背景からどんな影響を受けていたか論じる。芥川の生涯と文学に関する先行研究は多いが、生涯と社会の変遷と彼の作品にある登場人物の心理変化を一緒に論じる研究はまだ少ないと思われる。それで、本研究ではそのテーマをエジプト人の視点から研究する新しい側面から考察したい。

1.明治維新と日本近代化過程

明治時代（1868年~1912年）では、日本は欧米文明から非常に影響を受けた。江戸時代の長い鎖国が終わり、19世紀末に日本が開国し

た。日本は明治維新によって、様々な変化もあり、日本社会が急激に近代化へ向かっていた。日本は西洋をモデルにしようと決意した。それで、日本の政府は1871年（明治4年）から近代技術や社会制度などの輸入を図ることにした。例えば、1872年(明治5)の学制は欧米の学校制度をモデルとして施行しており、留学生の派遣や、御雇外人を招くという文化政策を実施した。それに、新聞雑誌などを発行し、明六社による啓蒙活動なども行われた。また、経済成長によって、西洋館が建てられ、鉄道が敷かれ、郵便が開始された。その上、洋服や洋食は日本人の生活にも入った。

また、明治時代では、日本の政府は国民を統合し、近代国家になるために、様々な政策を行っていた。まず、日本国家を示す統一的な言語をつくるために、人の言葉・方言の整理と統一も努力されている。日本には昔からたくさんの方言が存在するので、出身が異なれば話が通じない場合もあった。また、地域や階層ごとに異なるため、国民国家を表す国語を作ることが必要になった。国語は1900年前後の日本で誕生した新しい言語だと言える。日本においては、日常用いられる話し言葉によって文章を書く傾向が現れた。また、書き言葉はある程度統一されていたが、知識階層の用いる漢文訓読体が最も有力であった。そのため、全国民が簡単に習得できる「標準語」を作成しなければならなくなった。

岡本（2009）は、「明治27（1894年）年の日清戦争を契機としてナショナリズムが高まり、言語の統一・統一言語の策定を図ろうとする動きが急激に進んだ。」と指摘した。日清戦争後、上田万年[1]は標準語制定を急務とし、言文一致を主張した。彼は、１８９４年（明治27）にヨーロッパから帰国し、「国語と国家と」と題する講演をした。この講演の内容は、（明治2８）１８９５年刊行の「国語のため」という本の巻頭に収められている。これには、上田が日本「国家」の「国語」政策に関する意見を示し、日本国民が「国体」（世襲の天皇が統治する政治制度）と「国語」（日本人にとって自分の

属する国家のことばである日本語）とを一体のものとして認識し、天皇への忠誠と日本語への愛とを「選択の自由」なく自らのものとするようにということを指摘した。そして、彼が『標準語に就きて』を発表した明治28年以降、「東京山手の教育ある中流家庭」の言葉が標準語の形を明確にしようとする動きが活発になった。

明治になって東京では、武家屋敷があった山の手に、地方出身の政府の若い官が住むようになり、言葉に大きな影響を与えたといわれる。日本語においては、明治中期から昭和前期にかけて、主に東京山の手の教養層が使用する言葉を基に標準語を整備しようという試みが推進された。天皇の母語である京都語より東京語は標準語のモデルにさらにふさわしいと考えられるようになった。また、岡本（2009）によれば「『東京山手の教育ある中流家庭』の言葉が標準語のベースとなり、天皇の母語である京都語が方言となったのは、政治的に前者（明治維新政権を主導した元下級・中級武士）が上で、後者（天皇）が下だったということになる。」と明らかにした。

「標準語」が作成されたあと、その言語を普及するために教育政策が必要であった。日本政府はどんな教育政策を採っているか、または、明治期の日本教育における標準語は如何に実行されていたか以下のように明らかにする。日本には、近代的な国民国家として確立したいとする強固な意志があった。また、明治期に日本国家建設と共に、国民普通教育の必要性が生じた。そこで、国民の中でだれでも学校へ行って、本を読まなければならなくなったと言える。明治19年（1886年）の小学校令によって、日本の教育制度はほぼ基本的体制を確立した。そして、明治20年代以降、義務教育で、「標準語・国語」が生徒に教え込まれるようになった。それに従って、文部省は標準語の普及のために、小学校の「国定読本」を編集した。

また、近代日本におけるナショナリズムの目標の一つと言えば、アジア主義の実現であったので、日本はアジアにある海外植民地においても標準語の教育も行われていた。近代日本は東南アジアの植民地や、資源を求めており、アジアから欧米を追い出し、アジア民族だけで仲良く暮らそうという「大東亜共栄圏」というスローガンを

掲げていた。明治時代の終わり、日本は日清戦争と日露戦争をきっかけに中国大陸に植民地を段々作っていった。その植民地は日本の一部になったので、そこにも日本の標準語教育が行われるようになった。

中国大陸における政策と言えば、日本政府が日本語教育のために、関東州で「公学堂」を建設することによくみられる。また、植民地における日本語教育政策は言語政策だけではなく文化政策や政治政策も含めていた。また、大正１４年から始まったラジオ放送で使用される標準語により、共通の日本語・標準語は広まっていき、日本の国語政策は突き進んでゆくことになった。

日本教育における「標準語」は国民の思想や日本文学に非常に影響を与えた。日本の政府は教育を通して子供をはじめに国民に愛国心や国民意識を高くしよう努力していた。また、教育だけではなく近代日本文学も国語から影響を受け、標準語の普及に貢献した。近代日本小説における言文一致、また近代文学を中心に標準語の影響力を以下のように明らかにする。

1.1日本近代文学における言文一致

言文一致運動が本格的に考えられるのは明治維新後からで、徐々に当時の知識人より言文一致　が唱えられるようになった。言文一致とは思想と感情を自由的確に表現するために、書き言葉の文体を話し言葉に近づけようとする主張している。言文一致運動は日本の近代文学の発達に大きく貢献した。また、言文一致体が文学のものだけではなく、近代国家のために標準語の実行と普及の手段として大きな役割を果たしていた。

言文一致運動とは、周知の通り文章を話し言葉に近づけ、小説などにおいて思想や感情を自由に表現するための新たな「口語文」を形成しようとする運動である。杉崎（2017）は「明治20年に、二葉亭四迷や山田美妙らの言文一致小説が発表され、世間の注目を浴び　た

。」と明らかにした。例えば、二葉亭四迷の『浮雲』や尾崎紅葉の『多情多恨』　などにおいてはよく言文一致体が採用されている。杉崎（2017）によれば、この作家の文末表現が「～だ」「～です」であったことから、二葉亭四迷の「だ」　体、山田美妙の「です」体と言われたことも有名であると考えられる。すなわち、明治初期より言文一致運動ならびに実践が行われ、二葉亭四迷・山田美妙・尾崎紅葉らが小説に試み、そして、明治40年代以降、近代小説の文体として確立した。

文学作品における言文一致と教育の関係については杉崎氏が以下のように述べている。「小学校教育における国　定教科書（読本）にも山田美妙の「です」体が採用され、次第に言文一致体が広く一般に見られるようになり、大正時代とずいぶん先になるが新聞の社説も（大正10年）言文一致体で書かれ　るようになる。」と明らかにした。二葉亭四迷・山田美妙・尾崎紅葉らは新聞や雑誌によって、「標準語」の確立に定着してみた。そのため、文学者は日本政府による言語政策が本格的に始動すると言える。杉崎（2017）は「明治15年以降の新聞の大衆化とは、当時の庶民的な表現になったという事であり、　その文体は普段使用していた易しい文語体の表現であったと考えられる。」と述べた。

佐藤（2001）によれば、芥川と言文一致の関係について「『しゃべるやうに書きたい』という願いと同時に、『書くやうにしゃべりたい』と思う芥川。けれども、芥川の想いは、あくまでも『書く』ことが基盤となっている」と述べている。そのうえ、篠崎美生子(2017)は「言葉に『内面』を充填する読書パラダイムの成立については、柄谷行人に早い言及がある。柄谷によれば、飾り気のない俗語（言文一致文体）の背後に『内面』が潜むことを読者が期待したそのときから、『内面』を書く・読むメディアとしての『文学』がスタートしたのだという。」と指摘した。つまり、近代日本の言文一致によって、人間の内面をより自由に描写している新しい文学は生まれたとみられる。

また、この標準化された文体・口語はもちろん「日本人」というアイデンティティにも非常に影響を与えたとも言える。それに、日本の明治開化期では西洋の文明が導入されると、西洋の個人主義・自由主義思想なども導入されていた。それで、明治期には文明論が流行する時代の要求があった。つまり、西洋文化の受内に関する議論が多くなった。例えば、福沢諭吉などのその時期の知識人の文明論争には、盲目的に欧米思想を崇拝しないように激しい相対観が見えた。

つまり、日本は明治開化期に西洋文明を多く受容したが、その西洋思想をそのまま写るわけではなかった。かえって、日本は西洋文明から最良の形や内容を受容して、日本の伝問的な思想や心も含めてみたと言える。それで、東西思想の対立及び価値葛藤が生み出す背景もよくみられ、芥川などの近代作家によって表現されているようになった。芥川は多くの作品で日本と西洋の価値葛藤、その葛藤による近代日本人の苦悩をテーマにし、近代社会の変遷も触れている。また、芥川が生きた時代の歴史的な背景や社会事件からも影響を受けたと言える。以下のように彼に与えた影響を明らかにする。

2. 明治末期・大正期・昭和初期の歴史的な背景

芥川は大正期を代表する作家であるが、彼が子供の頃は明治末期であり、大正期と昭和期の始まりも生きていた。つまり、彼は三つの時代の出来事から影響を受けたと言える。それで、芥川がどんな社会に生きたか、どんな事件から影響を受けたか、次のように見てみよう。まず、明治時代の終わりに日本には二つの戦争があった。日本は西洋文化の普及や近代産業などの発達に向かっていると、海外へ進出しようと考えるようになった。そこで、日本はまず清国の勢力範囲にあった朝鮮へ勢力を伸ばそうとしたために、日本と中国の対立つまり日清戦争（1894年-1895年）が起こった。日本は中国に勝ち、そして、中国から賠償金をとり、台湾や遼東半島を日本の領土にした。その後、日本が韓国へ進出しようとすると、ロシアも大陸

での勢力を伸ばしてきた。そのため、ロシアと日本の対立がますます激しくなり、日露戦争（1904年－1905年）が起き、この戦争でイギリスは1902年に結ばれた「日英同盟」[2]の関係で日本を非常に助けた。日本はロシアに勝っていたが、戦争を続ける費用がなくなり、1905年（明治38年）に両国は条約を結んで、戦争を終えた。その戦争で、韓国、台湾、樺太などが併合できたが、大正時代になるとそれが日本の財政にますます重い負担になり始めていたということである。

日清戦争と日露戦争は芥川の子供のころに起こったが、彼の作品に影響を与えた。すなわち、日清戦争は「日本にとっては国家の運命を分けかねない戦争だったのだ。連戦連勝を重ねる日本軍に国民は熱狂した。2歳だった龍之介に記憶はなかっただろうが、小説「首が落ちた話」で日清戦争を描いている。」[3]また、日露戦争は日本という国、または日本人にとって一つの転換点ともいえるだろう。世界の国々では日本の位置を確認できる戦争だとも思われる。

大正時代に入ると、まもなくヨーロッパで第一次世界大戦が起こった。この戦争はヨーロッパで行われていたが、日本は日英同盟を名目として戦争に参戦した。日本はヨーロッパの国々が戦っている間、これをチャンスとして、アジアで影響力を広げ始めたのである。そこで、ドイツと戦い、中国にあるドイツの軍事基地（シャントン半島）を占領し、そして、中国に対して二十一か条の要求を出した。

また、第一次世界大戦では日本の経済が非常に発展し、産業も発達した。さらに、輸出が多くなり、それまでにない好景気を迎えた。つまり、日本は政治的・経済的に成長している時代に、芥川龍之介も人気作家として成長しており、児童文学の傑作である「蜘蛛の糸」を発表した。

芥川が生きた時代における三つの戦争は大きく彼の作品や作風に影響を与えた。関口安義の2016年に行われたインタビューによると、以下のように述べている。「彼が生きた時代には3つの戦争があり

ました。日清戦争と日露戦争、そして第一次世界大戦です。戦争は彼の創作と評価の題材にもしばしば取り上げられ、彼はそこに自己の歴史認識を示しています。例えば、『将軍』や『桃太郎』では、反戦思想を示した。」[4]また、この三つの戦争をきっかけに、日本はアジアで影響力を高めること望んだと言える。これは、昭和時代の最初期においてよく見える。昭和時代の始まりとともに、日本は軍国主義が強く存在感を示すようになっていった。日本は朝鮮を併合できたので、中国では、さらに影響力を伸ばすことを目的とした。

1918年（大正７）に第1次世界大戦が終わったあと、日本の内部と外部の状況には様々な変化があった。まず、日本の国内では第一次世界大戦 が終わってから、 日本 の好況も終わった。また、戦争の頃、大資本家が多く現れたため、生活の苦しい人も多くなってきた。しかも、戦後、米をはじめ生活に必要なものの値段がどんどん上がり、人々の生活が苦しくなってきた。それで、1918年（大正７）に富山県の漁師の主婦たちは米の値段をさげるように要求して抗議を始めた。このことを契機に、この騒動は全国に広がり、約70万人が参加し、労働者及び農民運動に発展した。結局、内閣は責任を取って辞職し、その後、原敬氏によって日本で最初の本格的な政党内閣がつくられた。政党内閣がついに国の政治の正当な要素として認められた。芥川は社会の関心が高かったので、米騒動や社会的な運動を『蜜柑』などの作品で描いた。

また、日本と世界の関係と言えば、戦後、1919年に日本がパリで開かれた講和会議に戦勝国として出席した。これによって、軍事的に経済的に成長した国として見られるようになったと言える。そして、翌年に世界の平和を目指す国際連盟が設立され、日本がその常任理事国として認められるようになった。

日本は、日清戦争と日露戦争のおかげで、豊かな資源が手に入るようになり、重工業などが発展した。このような産業革命の結果、資本主義が発展し、大地主や財閥を経営する資本家は、日本の政治に

も非常に大きな影響力を持ち、社会的な問題が生まれてしまった。このような状況下で、日本にも社会主義思想が広まり、労働運動・社会運動などもできた。そのため、大正時代で注目されることの一つは「大正デモクラシー」である。近代日本とくに大正期では、民主主義、自由主義、個人主義への意識の高まり、社会運動が全国に普及していた。政治上、衆議院に責任を負う政党内閣を求める人々が現れ、その声が上がった。そのような内閣は米騒動が起こったあと、1918年（大正７）に原敬により設立された。また、普通選挙を求める運動があり、1925年（大正14）に政府は25才以上のすべての男子が衆議権の選挙権を与えた。一方、政府は社会運動などに対する取り締まりを厳しくするため治安維持法も成立させた。

また、1923年（大正1２）9月1日に関東地方を中心にマグニチュード7.9の地震が起こった。地震によって、東京や横浜における多くの家などが焼け、死者と負傷者の人数は非常に多く、日本で最大の工業地帯である京浜工業地帯などにも大きな被害を受けたので、日本の経済は大きな打撃を受けたと言える。芥川は、田端の自宅で関東大震災を経験した。家族と家は無事であったが、震災後の混乱の中で、彼は近所の人々と自警団員になった。また、彼はその体験について述べ、「大正十二年九月一日の大震に際して」という文を残した。

男性より低く見られ、差別されてきた女性がいたので、平塚雷鳥[5]や市川 房枝[6]などを中心に、社会では女性の権利と地位向上をめざす運動を進めており、選挙権を認められるように要求した。また、明治時代において四民が平等になっても、就職や結婚などで差別され、苦しめられてきた人々によって、差別をなくす運動が立ち上げられた。芥川はこれにも関心を向け、社会主義に関する書物をよく読んでいる。差別の問題に対して関心を持っていた。それで、彼は階級の差別をいくつかの作品のヒントにしていた。すなわち、芥川が生きた時代の文化と言えば、非常に豊かな時代であった。大正時代では、教育及び文化も普及し、文学、演劇、音楽、それに絵画は西洋

文化から影響を受け、新しいものがうまれた。また、マスメディアが発展し、1925年（大正14）にラジオ放送も始まった。

1926年から「昭和」という新しい時代が始まった。昭和時代の最初期と言えば、一番注目されるのは昭和金融恐慌である。それは1927年（昭和2年）に銀行から資金を借りた会社が相次いで倒産し、銀行は預金者にお金を支払うことができなくなってしまったので、多くの人々は慌てて預金を引き出すようになった。この金融恐慌は芥川の自殺の一つの原因だとみられる意見もある。この金融恐慌によって、社会的、経済的、政治的に混乱が起き、彼は不安感などを抱くようになって19２7年に自殺した。彼の自殺の理由と言えば、様々な説があるが、この金融恐慌は一つの原因だと言える。

以上に述べように、芥川が生きた時代は不安であり、様々な変化があった時代と言える。柄谷行人氏は(2016)『日本精神分析－芥川龍之介「神神の微笑」－』で、芥川の作品における大正期の日本社会や日本人の精神などについて以下のように述べている。「日本人が日本人あるいは日本の文化について熱心に語り始めたのは、大正時代からである。大正時代は、西洋列強の下で、近代国家として自己確立するために懸命であった日本人が、日露戦争後そうした軍事的経済的緊張から解放され、また、自ら列強の中に入ったという誇りから、日本の文化的独自性をいい始めた時期である。しかし、それは日露戦争までの日本人のように、世界を規定している普遍的な「力」を忘れるということである。」ということである。

すなわち、芥川は様々な人生上の、社会の問題を抱え、悩み、矛盾、苦しみなどと闘っていた。関口(2001)の言葉を借りると、「1920年代の時代や社会の中で苦闘した芥川龍之介の問題は、21世紀を生きる私たち自身の問題でもあるという認識からのみ、新たな芥川像が刻まれるとしたい」と言える。こういった理由から、今でも日本だけではなく、世界中で芥川の作品を読まれていると言えるだろう。

3. 芥川龍之介の生涯

芥川が生きた時代背景だけではなく、彼の生涯にも様々な不安があったとわかる。芥川龍之介の生涯は関口（1992）によると、闘いの生涯として見られる。龍之介には生まれた時から、家族の中で様々な苦悩があり、彼に非常に影響を与えた。また、それは彼の文学作品にも多く反映していると言える。

龍之介は1892年（明治25年）3月１日に東京市京橋区入船町8丁目（現在の中央区明石町）で生まれた。父の新原敏三と母のフクの長男として生まれ、姉が二人いた。父は山口県出身であり、牛乳製造販売業を営んだ。母は東京に生まれ、芥川家の出身であり、9人兄弟の一人として育った。芥川家と言えば、江戸時代から代々幕府の御用部屋坊主をつとめていた旧家であった。龍之介の両親は晩婚であった。「龍之介は父42歳、母33歳のときの子だった。当時は『厄年に出産すると子供に厄がふりかかる』という迷信があり、厄年に生まれた子は捨て子にされるのが常だった。龍之介もまた当時の習慣にならって捨て子にされている。」[7]

生後８ヵ後ごろに母フクは突然精神に異常を来たして、発狂した。その理由には様々な説があった。一つは龍之介の生まれる年前、長女のハツが七歳でなくなった。龍之介の生母フクの発狂で、フクの実家の芥川家に預けられ、伯母フキに養育された。そして、1902年（明治35年）に実母は亡くなり、龍之介は正式に芥川家の養子となった。実母の精神的な病気や死亡は芥川に衝撃を与え、彼の生活と作品に大きな不安の影響を与えた。

関口（2003）によれば、「「二人の父」とは、言うまでもなく実父新原敏三と養父芥川道章である。また、「四人の母」とは、実母新原フクと養母芥川儒、それに育ての母の芥川フキ、さらに実父の後妻新原フユ（義母）を含めてのことである。」と述べている。すなわち、龍之介は「二人の父」と「四人の母」を持っていた。それは、彼の闘い生涯の中で迷っており、彼の生活に非常に影響を与えた。

第一父は龍之介の実父の新原敏三である。龍之介の回想によれば、父が短気で激しい性格の持ち主であった。龍之介は『点鬼簿』(1926)に実親の性格や二人との関係などについて述べ、父親について「**僕の父は又短気だつたから、度々誰とでも喧嘩をした**」と言う文を書いた。一方、以下のような文も残した。**「僕の父は幼い僕にこう云う珍らしいものを勧め、養家から僕を取り戻そうとした。僕は一夜大森の魚栄でアイスクリイムを勧められながら、露骨に実家へ逃げて来いと口説かれたことを覚えている。僕の父はこう云う時には頗(すこぶ)る巧言令色を弄(ろう)した。が、生憎(あいにく)その勧誘は一度も効を奏さなかった。それは僕が養家の父母を、――殊に伯母を愛していたからだった。」**

第二の父は実母フクの兄であり、養父の芥川道章である。芥川家は江戸時代から代々幕府の御用部屋坊主をつとめていた旧家であった。龍之介は新原の実家と芥川の養家の間におり、両家の中には返せ、返さない争いがあった。結局、龍之介は正式に芥川道章の養子となる。父になった道章から影響を受けて育ったと言える。これも後に、芥川の心に影響を与え、不安感を深かめる原因の一つとなった。また、関口（2003）は「龍之介は正式に芥川家の養子になるのだが、敏三は長ずるに及んで利発になる我が子への愛情を生涯捨てきれなかった。」と述べている。

二人の父について話したので、恒藤恭　(1949)の言葉を借りて、以下のようにまとめる。龍之介が敏三氏ではなく、道章氏の実子だと思われる。龍之介は実父に似ていなかったが、実母と彼女の家族の方に似ていた。それで、恒藤恭氏は龍之介の容貌は道章氏に似ているし、二人の一致する所が多かったと述べている。一方、性格の点といえば、逆になるかもしれない。すなわち、「龍之介は養父の道章氏ののんびりした性質には似ないで、実父の敏三氏の癇の強さうな性質を多分に受けついだようである」。[8]

四人の母と言えば、実母新原フク、養母芥川儒、育ての母の芥川フキ、実父の後妻新原フユである。第一の母は実母フクである。フクは長女ハツの死、厄年に龍之介が生れたこと及び捨て子にする悲しみ、兄弟の中の親しい兄の死から非常に影響を受けた。彼女は龍之介の生後8か月のときに、精神に異常をきたし、狂人になってしまった。

龍之介の回想によれば、母フクは美人であり、面立ちは龍之介に近く、内向的性格の人物であった。しかし、彼は普通の子供のように実母フクと一緒に時間を過ごすことができなったし、幼い頃に母フクが死亡した。龍之介は『点鬼簿』に実母について「**僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない**」と述べている。また、彼はいつも実母のように発狂する恐れを抱いており、その恐怖は彼の作品に反映しているし、彼の自殺の一つの原因だと言える。

龍之介の第二の母は、養父の芥川道章の妻であり、芥川儔である。彼女は龍之介が好きで、預かっていた。しかし、育ての母と言えるのは龍之介の第三の母であり、実母フクの姉の芥川フキである。彼女は龍之介を乳飲み子の頃から愛を込めて抱いて育て、成人するまで面倒をみた。

フキは龍之介を深く愛したが、彼を甘やかすことなく、礼儀正しく育てた。フキは教育に熱心であり、龍之介に早くから文字や数を教えた。また、彼女は文学への興味を持っていた。そのおかげで、龍之介は早くから本の世界を知り、速く本を読める才能を身につけた。そのことで、様々な本から情報を得るという習慣が生まれた。フキは龍之介に子供の頃、昔話や民話を読ませたので、後に、龍之介がその話を自身の作品の材料として使った。そのおかげで、自己の体験にのみ頼った同時代私小説作家との違いが龍之介の文学に生まれた。彼女は龍之介の文学世界に非常に影響を与えたと言える。

龍之介もフキが非常に好きであり、**『文学好きの家庭から』**で彼女について以下のようなことを書いた。「**家中で顔が一番私に似てゐるのもこの伯母なら、心もちの上で共通点の一番多いのもこの伯**

母です。伯母がゐなかつたら、今日のやうな私が出来たかどうかわかりません」と書いている。

龍之介の第四の母は、龍之介の実母フクの妹であり、実父新原敏三の後妻となった新原フユである。フユは姉フクの発狂で、新原家に手伝いに行っていた。しかし、フユは敏三と関わりがあり、二人の間に「得二」という子供ができた。これは芥川家と並んで新原家にとっては一大事件であった。それに、この事件は龍之介の実母フクの死亡の原因の一つだと考えられる。

また、龍之介は夏目漱石、柳田国男、斎藤茂吉、里見弴など文学者と同じように、養子体験を持っている。この養子体験は龍之介の作品に大きな影響を与えたと言える。一方、篠崎　美生子氏によると、「契約書」の体験の影響は養子の影響より大きかったと考えられる。「契約書」というのは、新原敏三の長男であった龍之介が芥川道章の養子として入籍することになった書類である。以上のように述べたと、龍之介は新原の実家と芥川の養家の間におり、両家の中には返せ、返さない争いがあったが、漸く龍之介は正式に芥川道章の養子になった。篠崎　美生子氏によると、「「契約書」という一枚の紙切れで、あるいはそこに記された言葉によって人間関係が決定・変更される体験を、芥川が幼少期から繰り返している、ということである」[9]と述べている。

龍之介は江東小学校高等科に通っており、1905年（明治38年）に江東小学校高等科3年を終了し、東京府立第三中学校に入学した。読書や文学に関する興味は高くなった。夏目漱石や森鴎外などの日本人の作家の作品とともにイプセンなどの外国人の作家の作品を読んでいた。そして、1910年（明治4３年）に第一高等学校第一部乙類に入学した。同期入学に久米正雄、菊池寛、松岡譲などがいた。龍之介は世紀末文学や芸術至上主義に興味を持ち、ボードレエルやストリンドベリイを読んでいた。彼が育った芥川家では、美術だけではなく芝居や音楽に関する興味も高かった。

1911年（明治44年）に一高で行われた「謀叛論」の演説に龍之介は参加している。この演説から多くの影響を受けたと思われる。『龍之介の生き方と言葉』によると、この演説の内容は、大逆事件での政治の過ちを指摘し、無政府主義者への弾圧がさらなる無政府主義者を生むことを説き、また、社会主義などはどこにでもあるものだとし、社会主義者に対する神経質な対応を嘆いていると理解した。また、「謀叛論」の「新しいものは常に謀叛である」及び「生きるために常に謀叛しなければならぬ」という叫びは、やがて日本を担っていく龍之介などの若者たちに非常に影響を与えた。すなわち、彼の作品ではマルクス主義や社会主義の傾向も見える。

1913年（大正2年）には、龍之介は東京帝国大学文科大学英文学科へ進学し、1914年（大正3年）2月に久米正雄、菊池寛、松岡譲と第３次『新思潮』の発刊に参加した。彼はフランスの文学・芸術・哲学に興味を持っていたので、フランス語の作品を翻訳していた。1915年（大正4年）に失恋の事件があり、人間のエゴイズムをテーマしていた『羅生門』という小説を発表した。そして、『新思潮』で次々に作品を発表していった。

1916年（大正5年）7月に東京帝国大学文科大学英文学科を卒業した。そして、神奈川県鎌倉市に行き、海軍機関学校で英語教師として勤めた。次年、龍之介は友人の山本喜誉司の姉の娘である塚本文と結婚した。海軍機関学校で働きながら、大阪毎日新聞社社友となり、鎌倉町大町に転居した。彼は歴史小説の『地獄変』を発表し、『蜘蛛の糸』や『奉教人の死』などの力作を発表した。

1921年（大正10年）に、大阪毎日海新聞社の客員として中国を訪れた。中国で、体の調子が悪化し、3週間ほど入院した。帰国後、体の調子が非常に悪くなり、神経衰弱や腸カタルなどにも悩むようになった。その中国旅は彼の思想や作品に非常に影響を与え、転機として考えられる。先行研究によると、彼の作品はよりリアリズムと鋭い批評に進んでおり、特に当時の日本の帝国主義的態度に対する彼の批判的な見方がよく読み取れるということである。

龍之介の健康がさらに悪化し、書く意欲が弱くなってきて、作品数が減っていくが、この頃からいわゆる「保吉もの」などの私小説的に向かう作品が発表され、この流れは晩年『歯車』『河童』などに見える。神経衰弱・不眠症が激しくなると、睡眠薬の量が増え続けた。また、1926年（昭和1年）に書いた『点鬼簿』で「**僕の母は狂人だった**」と告白し、自分が抱いている不安な心を描写した。

1927年（昭和2年）に姉のヒサの嫁ぎ先だった西川豊の家で火災が発生し、その二日後、放火の嫌疑をかけられた西川が鉄道自殺した。その後始末のため、病身ながらも、奔走した（『芥川龍之介の生き方と言葉』）。7月23日に「続西方の人」を書きあげたが、24日に服毒自殺を行った。彼は致死量のベロナールとジャールを飲んで自殺した。彼が見つかったとき、その隣に読んでいた聖書と「或旧友へ送る手記」の（ぼんやりした不安）の1節があった。

龍之介の自殺は社会に衝撃を与え、彼の自殺に関する研究も行われた。心身の衰えや社会の混乱などの様々な原因で自殺することを決心したと思われる。彼は実母の精神的な病気や狂気が遺伝する恐れがあったので、いつも心の不安を抱いていたのである。それに、神経衰弱・不眠症の激しさ及び睡眠薬の量である。また、大正時代の終わりと昭和時代の初めにおける社会的と経済的な混乱から影響も受け、悲観的に人生を見るようになった。現実を避けられなくなり、死を選んだと考えられる。

以上をまとめると、芥川が生きた時代や環境を見ると、不安な個人人生を送っているし、混乱した社会における変化や事件に出会った。彼の文学には様々な特徴があったが、最も注目されるのは人間の心理描写だと言える。彼は人間の生活及び感情に関心を持ち、社会の問題を発表していた。彼が生きている不安や混乱の中で作品を通じて安定性や救いを探求していた。また、彼の葛藤や心理変化は作品の登場人物の心理変化を通じて描写したと言える。これは彼の文学作品の流れには以下のように明らかにする。

4.芥川龍之介の文学における葛藤や心理変化

明治時代の終わりから大正時代の始まりにかけて、夏目漱石や森鴎外などには反自然主義を呼びかけた。その後、道徳・倫理にとらわれず、美を最高のものとする耽美派が現れた。同時に、武者小路実篤や志賀直哉によって白樺派は作られた。白樺派は個人とその自由を尊重し、人間を「善なるもの」と肯定する立場から作品を発表し、理想化は行われる。しかし、白樺派の理想主義が主観的・空想的に過ぎ、現実を見失っている。そこで、耽美派の描く美や、白樺派の描く善と異なる新しい視点で現実を見直そうとする動きが生まれた。芥川を代表する新現実主義が生れたのである。

芥川はもともと夏目漱石や森鴎外などの作品における反自然主義から非常に影響を受けた。そこで芥川は当時の社会及び人々により合う作品を書く必要性を感じて新現実主義を作成し、理知的で技巧的で精緻なる作品を発表した。新現実主義は大正中期に興った新しい文学傾向であり、個人主義の新らしい立場から現実を取り直していると言える。新思潮派、新理知派、新技巧派とも呼ばれることがある。

芥川は特に夏目漱石の文学作品とスタイルから影響を受け、その作品によく現れる。1915（大正4年）11月に芥川は久米と漱石の木曜会に初めて出席した。そして、次年に久米正雄や菊池寛などと第４次『新思潮』を刊行したあと、『鼻』を載せ、漱石から激賞され、文壇登場の契機になったと言える。芥川は漱石の弟子としてみられ、漱石が書いた評論や作品のテーマなどはその作品にも発表していく。

夏目漱石と森鴎外は明治維新による近代化を主にテーマにし、近代化による人間の暗い面を表現した。しかし、二人の作家は知識人を中心に近代人の内面や心理的な葛藤を描写した。一方、芥川の作品では、知識人だけではなく、民衆を中心にして人間のエゴイズム及び悪魔性をより深く考察した。また描かれたエゴイズムには様々なモチーフがあった。それは、明治維新の影響は大正時代まで続き、

全国に広がって民衆化したためである。明治維新及び西洋化とともに、日本人は作品で複雑な心や矛盾している感情を正直に、克明に述べる傾向が見られる。すなわち、以前は表面化できなかった、描写できなかった人の感情、特に人の暗い面についてより深く述べるようになった。特に芥川が生きた時代では、明治維新による近代化や革命は政治だけではなく、人間の考え方にも及んでいる。

また、芥川は外国人の作家のリアリズムから影響も受け、特に、アメリカ人の短編小説家のエドガー・アラン・ポーの文学スタイルから非常に影響を受けた。一方、芥川はエドガーと同様に人間の悲しみ、嫌悪、苦悩、恐怖などの心理的な内面を描いたが、芥川の方が人間の心理描写を詳細に描くことができ、新しい理知的な解釈を加えたと評価されている。また、芥川は当時の作家と比べると、登場人物の心理描写及び人間の複雑な心の深い観察をすることができたと言える。

芥川は「芸術」と「生活」・「人間」・「社会」の関係をよく考えており、最初は芸術的価値のために芸術至上主義的な作品を書いたが、その後、社会を詳しく触れる作品を発表するために、「芸術」と「生活」をさらに結び付けた方がいいと考えた。そして、社会や人間の心を克明に描写している作品を書き出した。彼は小説が人間の内面を深く考察でき、当時の社会の問題や悩みを表すと非常に芸術的価値があると思っていた。

また、芥川はフロイトの精神分析から影響も受け、人間は自身もともと矛盾している心を抱いていることを明らかにした。フロイトの精神分析を用いて、人間の苦悩の複雑な様子を描き出すようになった。それで、彼が書いた作品の登場人物の心理描写によって、人間の矛盾や苦悩などが描写できた。　また、芥川は人間の心に関心を持っており、禅から影響を受けたと思われる。芥川の作品では登場人物の心理描写を通じて、人間の複雑な心、矛盾、闘いを発表していた。例えば、善と悪、エゴイズムと愛、利己主義と滅私の精神、戦

争と平和などの矛盾な葛藤に関心を持っていた。中村（2015）は「芥川龍之介は、「人間」という言葉をたえず　発音していた作家だった。それは大正時代が、我が国の近代文学の歴史のなかで最も人間的な時代だったからである。少なくとも人間的という言葉に、最も新鮮な魅力を感じていた時代だったからである。」としている。

4.1**芥川作品の流れ**

芥川が生きた環境には政治的、社会的、思想的に様々な変化があったので、それは彼の作品に反映していると見える。芥川が短い生涯を通して、歴史物、キリシタン物、児童向けの作品、芸術至上主義的な作品、社会主義の作品、私小説などの様々な種類の作品を書き上げた。そこで、芥川の作品は初期、中期、晩年の三つに分ける。初期、中期、晩年で文体や志向が異なることでも知られている。特に、初期と晩年の作風はかなり違うと注目される。

4.1.1初期：

1914年から1917年までが初期である。『今昔物語』や『宇治拾遺物語』などの説話文学を典拠とした歴史物が多かった。例えば、『鼻』、『羅生門』、『芋粥』などである。この歴史物では、歴史的題材を駆使して作中人物の心理を近代的な人間の内面、特にエゴイズムを描写した。この歴史物については、関口（2007）は「芥川は歴史に衣装を借りて、近代に生きる人間の苦悩を描き出し、さまざまな制度の束縛の中で、いかに生きるべきかに思いを馳せているのである。」と述べている。その上、『羅生門』などの初期作品は初期芥川の自己解放の叫びが託された小説だと思われる。また、『戯作三昧』などの江戸物も書き出した。

4.1.2中期：

1918年から1922年までが中期である。この時期の芥川は歴史物を書き続けたが、『奉教人の死　』や『きりしとほろ上人伝』などの切支丹物を多く書いていた。そのうえに、『雛』や『舞踏会』などの開化物、及び『蜘蛛の系』や『杜子春』など中国とインドを題材し

た作品も見られる。また、芥川は芸術至上主義的な面が全面に出た『地獄変』などを書いた一方、『蜜柑』や『秋』などの日常的現実を描写している作品を書き始めた。また、長編に挑戦して『邪宗門』を発表した。

相川直之（2003）によれば、1919年に芥川が大阪毎日新聞社の社員になると、「書く義務を背負っての執筆活動は、より芥川の文学思想をより現実に近づけた。つまり、同時代における読者の存在を意識するようになったのである。」と述べている。また、中村真一郎（2015）によれば、「1919年—1922年の間に、彼の人間としての生と作家としての生との間に存在していた関係について、芥川の意識の中で一つの断絶が行われる。彼の審美主義の背後にかくれていたその関係の曖昧さをもはや支えることができなくなり、彼は明晰さと正確さとをもって想像を表現することを可能にするより裸の文体を求めるようになる。その想像がもはや逃避ではなく逆に彼自身の日常的現実への復帰であるように。」と述べた。つまり、中村真一郎によれば、前・中期の歴史小説で芥川は自己の感情の表出を避け、日常的現実から全く遠ざかった過去に題材を求めると思われ、芥川にとって過去というのは夢の一形式であり、現実逃避の傾向が強くなったと見られる。芥川は前・中期には、フィクション性の高い小説を多く発表したが、当時の社会及び読者に最も適当なのは日常生活などのもっとリアリティーを含む作品を書き出すことと考えられる。

4.1.3晩年：

1923年から1927年までは後期である。この時期の芥川は体の調子が悪く、神経衰弱・不眠症が激しくなった。また、関東大震災後、日本の社会では不安及び混乱が起きたので、彼は自殺を考えており、自分の作品に反映している。彼は生死に関する作品を多く書き、それに、自分のこれまでの人生を見直したり、自分の心における不安や恐怖を表したりする自伝の小説を書き出した。注目されるのは、

初期より晩年の方を高く評価する見解を示す批評家や研究者がいることである。晩年の主な作品は『歯車』『河童』『点鬼簿』『ある阿呆の一生』などがある。しかし、一番有名な代表作は『河童』だと言える。芥川は晩年の作品には「死」と「狂気」について書かれたものが多いので、わかりにくいところが多いと考えられる。また、芥川は初期から社会主義に関心を持っていたと思われるが、晩年の作品でよく見られる。彼は社会主義思想、マルクス主義、プロレタリア文学の影響から受けたと考えられる。

つまり、芥川は年代と共に、芸術や生活などに対する見方は異なっていく。そして、芥川の心理の変化とともに、初期、中期、晩年では作品の文体や志向が異なってきた。彼の心理変化は作品の登場人物の心理変化を通じて描写した。例えば、このような心理変化を考察すれば、エゴイズム及び現実などの価値に対する彼の見方は以下のようなことが言える。芥川は最初の作品では現実を描写しようとしたが、結局、エゴイズムや暗い点だけを焦点とした。それから、エゴイズムだけを描写していては、本当の現実にならないと思っていた芥川は、『秋』や『蜜柑』などの中期作品では明るい人間の性格も描写してみた。また、現実は一つではないとわかり、それを『藪の中』で表現した。現実は一つの面だけではなく、全くの現実が存在していないことも発見した。「一つの事実」が存在していない、しかも、「事実」の存在を疑っている。晩年の作品では「ユートピア」の世界を目指していた芥川は、当時の社会を批判し、人間の美へ向かうように叫んでいた。それで、当時の人々は悪魔性と戦うために、偽善より真実を告白した方がいいのではないだろうかと芥川は考えている。

先行研究によると、芥川の多くの作品では、人間の悪魔性とエゴイズムがよく描写されていると述べている。しかし、エゴイズムの描き方やモチーフは年代と共に変化していくと言える。例えば、芥川は青年期の失恋体験による書いた『羅生門』の下人の心理変化を通して、日本と言う小さい国は成長しながら、周りの国と同様、エゴイスティックに第一次世界大戦に参加したということも読み取る。

そして、『鼻』では、主人公より周りの人のエゴイズムを描写しながら、人が世界から認められるために、また『羅生門』では、人が自分の性格を変化させることだけではなく、自分の形まで変化させるようになる。また、『首が落ちた話』では、芥川の「エゴイズム」の範囲を広げ、人間だけではなく、国のエゴイズムにも広げた。

芥川は大阪毎日新聞社の社員になり、様々な作品を発表すると、『地獄変』では、最高のエゴイズムを描写しながら、まず、芸術のために、愛する娘の命を犠牲にした父親の「狂気のエゴイズム」と並んで、権力者の誇大妄想狂と色欲と抑圧によるエゴイズムも表した。そして、中期作品の『蜜柑』では、当時の日本における階級差別に隠されているエゴイズムを描写し、民主主義が広がるなどの変化とともに、心理小説に関心を持っていた芥川が『秋』では、嫉妬のエゴイズムも発表している。彼はその変化と共に彼の見方は少し異なっていく。つまり、真実の存在及び意義という疑問も追及し、芥川は『藪の中』によって、まったくの「真実」が存在してないことを表現した。また、彼の自殺前、神経衰弱・不眠症の激しさ及び社会の混乱と共に、晩年の『河童』では、当時の人間社会、その価値観、国の規則などを非常に批判している。

また、芥川の心理変化によって、語り手の役割が変化すると見られる。すなわち、初期の作品では、語り手が全ての話が分かるような様子で積極的に役割を果たしている。そして、中期では、語り手はそのような役割を果たしておきながら、芥川は『秋』、『蜜柑』、『藪の中』など、不明なところが多い作品を書いている。一つの事実が存在していないし、視点によって、様々な見方があると伝えたかったのかもしれない。むしろ、晩年の作品では、語り手は曖昧であり、わかりにくくするような役割を果たしていると考えられる。

このような心理変化の理由と言えば、芥川が生きた時代の変遷と繋がっていると言える。芥川の初期の作品では、エゴイズムを描写しながら、人の暗い面を焦点としている。日本が参加した3つの戦争に

おけるエゴイズムと悪魔性を見たためである。そして、日本の社会では、戦後、労働者などの運動、差別をなくす運動、自由と権利を呼びかける運動が現れると、明るい『蜜柑』などの作品を書き出し、エゴイズムより、人間の温かい心及び優しい性格を思い出させるように希望を持っていた。一方、晩年の芥川の時代は治安維持法などの厳しく取り締まる法律が出るし、社会は昭和金融恐慌による混乱と不安を抱きながら、日本はこれに立ち向かうため、アジアにおける権力を強めたいと考えていた。芥川はこのような世界に我慢できず、自殺しなければならないと思っていた。

登場人物の心理の変化は芥川の心理の変化を表している 。芥川が子供の時から闘いの人生を送っており、1歳になる前、実母が発狂し、伯母のフキに預けられて養子になった。しかも、彼が生きた時代は不安な時代だった。政治的・経済的・思想的に不安が蔓延していた。しかし、次第に、日本の地位は世界的に変化し、注目されるようになる。日本だけではなく、日本人にも影響を与えた。彼らは日本の伝統的な思想（禅など）と西洋思想（共産主義など）の間で混乱していた。悩んでいた芥川は普通の人間として、近代的日本人として抱いている葛藤と変遷の現実を描写することを求めた。作品の文章には生涯を通じて多少の変遷があることや社会の変化とともに、登場人物の心理描写も変化する。

まとめ：

芥川の心理変化は作品の登場人物の心理変化を通じて描写した。その作品における心理変化は登場人物の心の中にある葛藤によるものとして見られる。つまり、彼の作品の永遠のテーマは精神の孤独と人間の生き苦しさであると思われ、彼は価値葛藤については深く理解していた。これは、彼が子供のころから生きた環境、及び混乱した社会・時代で人生を送ったためだと言える。

芥川の考えによれば、当時の日本人は伝統的な日本のアイデンティティを見失い、新しい価値観を持ち、西洋などの他の社会と同様にエゴイスティックになる傾向があった。芥川は様々な哲学書を読ん

でいたので、「虚構の理想的な世界」を目指していた。それで、滅私の精神、平和、平等などを優先している昔の日本の単純性へまた戻ったらよいと主張している。「日本人は西洋人になることはできない。だがそれに気づいたときには、既に帰還すべき故郷を失っていたという日本近代の分裂を絶望的に語ったものとされ、東洋でも西洋でもなくなってしまった日本の滑稽な自画像とされたこの意識。」[9]という恐れも触れてきたと言える。このような葛藤は芥川が芸術家・知識人としてだけではなく、人間としても描写していた。近代日本人は、心に抱いているものを隠し、沈黙を選ぶか、はっきりと自分の気持ちを悪い気持ちでも表すか、と言う葛藤から悩んでいる。現代の日本人もこのような葛藤で悩んでいると考えられる。現在でも芥川の作品が読まれるのはこのような理由だからではないだろうか。

(1) 明治-昭和時代前期の国語学者。西欧の言語学研究方法を紹介し、国語音韻の研究に貢献した。
(2) 日英同盟：1902年、日本とイギリスの間の軍事応援を伴う同盟。日本が韓国で持つ権益を認めているので、イギリスと同盟した。そして、両国が中国で支配力をもつことに関心があり、どちらもこの地域でロシアの影響力が高まることを心配したので、同盟は行う。

(3)倉永一郎（2016)『芥川龍之介の生き方と言葉』メディアソフト P.29

(4)倉永一郎（2016)『芥川龍之介の生き方と言葉』メディアソフト P.70
(5)（1886年～1971年）大正・昭和期の評論家、婦人運動家。
(6)（1893年～1981年）婦人運動家・政治家。
(7)倉永一郎2016『芥川龍之介の生き方と言葉』メディアソフトP.18

(8)関口 安義 (2003)「二人の父と四人の母：芥川龍之介研究のために」都留文科大学研究紀要 (59), P.132-120（原稿は恒藤恭の『旧友芥川龍之介』（朝日新聞社、一九四九・八・一0）より）
(9)篠崎美生子(2000)『契約の中の「芥川龍之介」―家族・読者との間で ―』より→浅野 洋、三嶋 譲、芹沢 光興 (編集)『芥川龍之介を学ぶ人のために』世界思想社 P.20&21
(10) 佐藤 泉（1999）「芥川龍之介一九二二・一 : 日本文化論の文体について」青山學院女子短期大學紀要 (53)P.1-20

参考文献：

(1) 落合 修平（2020）「〈意識的芸術活動〉説・再考：芥川龍之介の文芸観をめぐって」明治大学文芸研究会 文芸研究：明治大学文学部紀要 (140) P.75-95
(2) 高 啓 豪(2018)「モダニスト芥川龍之介の研究―中国物・開化物・自己表象を中心として―」北海道大学 甲第13246号
(3) 篠崎美生子（2017）『弱い「内面」の陥穽 ー芥川龍之介から見た日本近代文学』 翰林書房 P.8
(4) 杉崎 夏夫（2017）「明治時代語の一考察 : 言文一致と標準語教育と新聞の文体の関係を中心に」 武蔵野大学教育学研究所 武蔵野教育学論集 2号 P. 47-56
(5) 奥田 雅則（2017）「芥川龍之介文芸研究 ： 芥川文芸における「闘い」をめぐって」関西学院大学 第617号
(6) 李 碩 （2017）「芥川龍之介小説のジャンル研究 ―小説形式と歴史の関係について」東京大学 第34392号
(7) 柄谷行人（2016）『日本精神分析』講談社 第５刷発行P.95
(8) 倉永一郎（2016）『芥川龍之介の生き方と言葉』メディアソフト
(9) 中村真一郎（2015）『芥川龍之介の世界』 岩波書店
（10）長行司研太（2010）「芥川龍之介小説にみる生の欲動と死の欲動の葛藤」佛教大学大学院紀要. 教育学研究科篇(38)P.55-72

(11) 岡本 雅享 （2009） 「言語不通の列島から単一言語発言への軌跡」 福岡県立大学人間社会学部紀要 17巻２号 P.11 – 31

(12) 関口 安義（2007）『世界文学としての芥川龍之介』新日本出版社P.58

(13) 奈保子高橋、奈保子大庭（2007）「近代文人としての芥川龍之介 : 芸術と風流の間で」大阪大学　第11515号

(14) 関口 安義（2003）「二人の父と四人の母 : 芥川龍之介研究のために」都留文科大学研究紀要 (59) P. 132-120

(15) 田村修一 （2003）『芥川龍之介青春の軌跡　イゴイズムをはなれた愛』　晃洋書房

(16) 相川直之（2003）「芥川龍之介研究 : 芸術至上主義の超克」　広島大学第2838号

(17) 佐藤 嗣男 (2001)『芥川龍之介―その文学の、地下水を探る』おうふう　P.15

(18) 関口安義（2001）「転換期の芥川龍之介」『特集 芥川龍之介の死とその周辺--転換期・1920年代と現代』日本文学協会近代部会近代文学研究 (18) P.1-15

(19) 浅野 洋、 三嶋 譲 、芹沢 光興 (編集)（2000）『芥川龍之介を学ぶ人のために』　世界思想社　P.20&21

(20) 佐藤 泉（1999）「芥川龍之介一九二二・一 : 日本文化論の文体について 」青山學院女子短期大學紀要 (53) P.1-20

(21) 関口 安義（1999）『芥川龍之介とその時代』筑摩書房

(22) 関口 安義（1992）『芥川龍之介―闘いの生涯』毎日新聞

مجلة
بحوث الشرق الأوسط

مجلة علمية مُحَكَّمَة
(مُعتمدة) شهريًا

العدد الثالث والتسعون
(نوفمبر 2023)

السنة التاسعة والأربعون
تأسست عام 1974

الترقيم الدولي: (2536-9504)
الترقيم على الإنترنت: (2735-5233)

يصدرها
مركز بحوث
الشرق الأوسط

الأراء الواردة داخل المجلة تعبر عن وجهة نظر أصحابها وليست مسئولية مركز بحوث الشرق الأوسط والدراسات المستقبلية

رقم الإيداع بدار الكتب والوثائق القومية : ٢٤٣٣٠ / ٢٠١٦

الترقيم الدولي: (Issn :2536 - 9504)

الترقيم على الإنترنت: (Online Issn :2735 - 5233)

ISSN 2536-9504

مجلة بحوث الشرق الأوسط

مجلة علمية مُحكَّمة
متخصصة
في شؤون الشرق الأوسط

مجلة مُعتمَدة من بنك المعرفة المصري

موقع المجلة على بنك المعرفة المصري

www.mercj.journals.ekb.eg

- معتمدة من الكشاف العربي للاستشهادات المرجعية (ARCI) . المتوافقة مع قاعدة بيانات كلاريفيت Clarivate الفرنسية.
- معتمدة من مؤسسة أرسيف (ARCIf) للاستشهادات المرجعية للمجلات العلمية العربية ومعامل التأثير المتوافقة مع المعايير العالمية.
- تنشر الأعداد تباعًا على موقع دار المنظومة.

دار المنظومة
DAR ALMANDUMAH
الرواد في قواعد المعلومات العربية

العدد الثالث والتسعون - نوفمبر ٢٠٢٣

تصدر شهريًّا

السنة التاسعة والأربعون - تأسست عام 1974

المطبعة
مطبعة جامعة عين شمس
Ain Shams University Press

مجلة بحوث الشرق الأوسط

(مجلة مُعتمدة) دوريَّة علميَّة مُحكَّمَة

(اثنا عشر عددًا سنويًّا)

يصدرها مركز بحوث الشرق الأوسط والدراسات المستقبلية - جامعة عين شمس

AIN SHAMS UNIVERSITY
MIDDLE EAST RESEARCH CENTER
مركز بحوث الشرق الأوسط
MERC

رئيس مجلس الإدارة

أ.د. غادة فاروق

نائب رئيس الجامعة لشؤون خدمة المجتمع وتنمية البيئة

ورئيس مجلس إدارة المركز

رئيس التحرير **د. حاتم العبد**

مدير مركز بحوث الشرق الأوسط والدراسات المستقبلية

هيئة التحرير

أ.د. السيد عبدالخالق، وزير التعليم العالي الأسبق، مصر

أ.د. أحمد بهاء الدين خيري، نائب وزير التعليم العالي الأسبق، مصر ؛

أ.د. محمد حسام لطفي، جامعة بني سويف، مصر ؛

أ.د. سعيد المصري، جامعة القاهرة، مصر ؛

أ.د. سوزان القليني، جامعة عين شمس، مصر ؛

أ.د. ماهر جميل أبوخوات، عميد كلية الحقوق، جامعة كفرالشيخ، مصر ؛

أ.د. أشرف مؤنس، جامعة عين شمس، مصر ؛

أ.د. حسام طنطاوي، عميد كلية الآثار، جامعة عين شمس، مصر ؛

أ.د. محمد إبراهيم الشافعي، وكيل كلية الحقوق، جامعة عين شمس، مصر

أ.د. تامر عبدالمنعم راضي، جامعة عين شمس، مصر ؛

أ.د. هاجر قلديش، جامعة قرطاج، تونس ؛

Prof. Petr MUZNY، جامعة جنيف، سويسرا ؛

Prof. Gabrielle KAUFMANN-KOHLER، جامعة جنيف، سويسرا ؛

Prof. Farah SAFI، جامعة كليرمون أوفيرني، فرنسا؛

إشراف إداري

أ/ سونيا عبد الحكيم

أمين المركز

إشراف فني

د/ امل حسن

رئيس وحدة التخطيط و المتابعة

سكرتارية التحرير

أ/ ناهد مبارز — رئيس قسم النشر

أ/ راندا نوار — قسم النشر

أ/ زينب أحمد — قسم النشر

أ/ شيماء بكر — قسم النشر

المحرر الفني

أ/ رشا عاطف — رئيس وحدة الدعم الفني

تنفيذ الغلاف والتجهيز والإخراج الفني للمجلة

وحدة الدعم الفني

تدقيق ومراجعة لغوية

د. هند رأفت عبد الفتاح

تصميم الغلاف أ/ أحمد محسن - مطبعة الجامعة

توجه المراسلات الخاصة بالمجلة إلى: د. حاتم العبد، رئيس التحرير merc.director@asu.edu.eg

• وسائل التواصل: البريد الإلكتروني للمجلة: technical.supp.mercj2022@gmail.com

البريد الإلكتروني لوحدة النشر: merc.pub@asu.edu.eg

جامعة عين شمس- شارع الخليفة المأمون- العباسية- القاهرة، جمهورية مصر العربية، ص.ب: 11566

(وحدة النشر - وحدة الدعم الفني) موبايل/ واتساب: 01555343797 (+2)

ترسل الأبحاث من خلال موقع المجلة على بنك المعرفة المصري: www.mercj.journals.ekb.eg

ولن يلتفت إلى الأبحاث المرسلة عن طريق آخر

الرؤيـــة

السعي لتحقيق الريادة في النشر العلمي المتميز في المحتوى والمضمون والتأثير والمرجعية في مجالات منطقة الشرق الأوسط وأقطاره .

الرسالـــة

نشر البحوث العلمية الأصيلة والرصينة والمبتكرة في مجالات الشرق الأوسط وأقطاره في مجالات اختصاص المجلة وفق المعايير والقواعد المهنية العالمية المعمول بها في المجلات المُحَكَّمَة دوليًّا.

الأهـــداف

- نشر البحوث العلمية الأصيلة والرصينة والمبتكرة .
- إتاحة المجال أمام العلماء والباحثين في مجالات اختصاص المجلة في التاريخ والجغرافيا والسياسة والاقتصاد والاجتماع والقانون وعلم النفس واللغة العربية وآدابها واللغة الانجليزية وآدابها ، على المستوى المحلى والإقليمي والعالمي لنشر بحوثهم وإنتاجهم العلمي .
- نشر أبحاث كبار الأساتذة وأبحاث الترقية للسادة الأساتذة المساعدين والسادة المدرسين بمختلف الجامعات المصرية والعربية والأجنبية ٠
- تشجيع ونشر مختلف البحوث المتعلقة بالدراسات المستقبلية والشرق الأوسط وأقطاره ٠
- الإسهام في تنمية مجتمع المعرفة في مجالات اختصاص المجلة من خلال نشر البحوث العلمية الرصينة والمتميزة .

مجلة بحوث الشرق الأوسط

- رئيس التحرير د. حاتم العبد

- الهيئة الاستشارية المصرية وفقًا للترتيب الهجائي:

- أ.د. إبراهيم عبد المنعم سلامة أبو العلا رئيس قسم التاريخ - كلية الآداب - جامعة الأسكندرية - مصر
- أ.د. أحمد الشربيني عميد كلية الآداب السابق - جامعة القاهرة - مصر
- أ.د. أحمد رجب محمد علي رزق عميد كلية الآثار - جامعة القاهرة - مصر
- أ.د. السيد فليفل عميد كلية الدراسات الأفريقية العليا الأسبق - جامعة القاهرة - مصر
- أ.د. إيمان محمد عبد المنعم عامر أستاذ التاريخ الحديث والمعاصر - كلية الآداب - جامعة القاهرة - مصر
- أ.د. أيمن فؤاد سيد رئيس الجمعية المصرية للدراسات التاريخية - مصر
- أ.د. جمال شفيق أحمد عامر كلية الدراسات العليا للطفولة - جامعة عين شمس - مصر
- أ.د. حمدي عبد الرحمن عميد كلية الحقوق الأسبق - جامعة عين شمس - مصر
- أ.د. حنان كامل متولي (قائم بعمل) عميد كلية الآداب - جامعة عين شمس - مصر
- أ.د. صالح حسن المسلوت أستاذ التاريخ والحضارة - كلية اللغة العربية - فرع الزقازيق جامعة الأزهر – مصر وعضو اللجنة العلمية الدائمة لترقية الأساتذة
- أ.د. عادل عبد الحافظ عثمان حمزة كلية الآداب - جامعة المنيا، ومقرر لجنة الترقيات بالمجلس الأعلى للجامعات - مصر
- أ.د. عاصم الدسوقي عميد كلية الآداب الأسبق - جامعة حلوان - مصر
- أ.د. عبد الحميد شلبي كلية اللغة العربية بالمنصورة - جامعة الأزهر - مصر
- أ.د. عفاف سيد صبره كلية الدراسات الإنسانية بنات بالقاهرة - جامعة الأزهر - مصر
- أ.د. عفيفي محمود إبراهيم كلية الآداب - جامعة بنها - مصر
- أ.د. فتحي الشرقاوي نائب رئيس جامعة عين شمس الأسبق - مصر
- أ.د. محمد الخزامي محمد عزيز عميد كلية العلوم الاجتماعية والإنسانية - جامعة الجلالة - مصر
- أ.د. محمد السعيد أحمد كلية التربية - جامعة عين شمس - مصر
- لواء / محمد عبد المقصود رئيس مركز المعلومات ودعم اتخاذ القرار بمجلس الوزراء - مصر
- أ.د. محمد مؤنس عوض كلية الآداب - جامعة عين شمس - مصر
- أ.د. مدحت محمد محمود أبو النصر كلية الخدمة الاجتماعية - جامعة حلوان قطاع الخدمة الاجتماعية بالمجلس الأعلى للجامعات ورئيس لجنة ترقية الأساتذة
- أ.د. مصطفى محمد البغدادي كلية التربية - جامعة عين شمس - مصر
- أ.د. نبيل السيد الطوخي رئيس قسم التاريخ - كلية الآداب - جامعة المنيا - مصر
- أ.د. نهى عثمان عبد اللطيف عزمي كلية السياحة والفنادق - جامعة مدينة السادات - مصر

- الهيئة الاستشارية العربية والدولية وفقًا للترتيب الهجائي:

- أ.د. إبراهيم خليل العَلاّف — جامعة الموصل- العراق
- أ.د. إبراهيم محمد بن حمد المزيني — كلية العلوم الاجتماعية - جامعة الإمام محمد بن سعود الإسلامية- السعودية
- أ.د. أحمد الحسو — جامعة مؤتة- الأردن
  مركز الحسو للدراسات الكمية والتراثية - إنجلترا
- أ.د. أحمد عمر الزيلعي — جامعة الملك سعود- السعودية
  الأمين العام لجمعية التاريخ والآثار التاريخية
- أ.د. عبد الله حميد العتابي — كلية التربية للبنات - جامعة بغداد - العراق
- أ.د. عبد الله سعيد الغامدي — جامعة أم القرى - السعودية
  عضو مجلس كلية التاريخ، ومركز تحقيق التراث بمعهد المخطوطات
- أ.د. فيصل عبد الله الكندري — جامعة الكويت- الكويت
- أ.د. مجدي فارح — رئيس قسم الماجستير والدراسات العليا - جامعة تونس١ - تونس
- أ.د. محمد بهجت قبيسي — جامعة حلب- سوريا
- أ.د. محمود صالح الكروي — كلية العلوم السياسية - جامعة بغداد- العراق

- *Prof. Dr. Albrecht Fuess* — Center for near and Middle Eastem Studies, University of Marburg, Germany
- *Prof. Dr. Andrew J. Smyth* — Southern Connecticut State University, USA
- *Prof. Dr. Graham Loud* — University Of Leeds, UK
- *Prof. Dr. Jeanne Dubino* — Appalachian State University, North Carolina, USA
- *Prof. Dr. Thomas Asbridge* — Queen Mary University of London, UK
- *Prof. Ulrike Freitag* — Institute of Islamic Studies, Belil Frie University, Germany

شروط النشر بالمجلة

- تُعنى المجلة بنشر البحوث المهتمة بمجالات العلوم الإنسانية والأدبية ؛
- يعتمد النشر على رأي اثنين من المحكمين المتخصصين ويتم التحكيم إلكترونيًّا ؛
- تقبل البحوث باللغة العربية أو بإحدى اللغات الأجنبية، **وترسل إلى موقع المجلة على بنك المعرفة المصري ويرفق مع البحث ملف بيانات الباحث يحتوي على عنوان البحث باللغتين العربية والإنجليزية واسم الباحث والتايتل والانتماء المؤسسي باللغتين العربية والإنجليزية، ورقم واتساب، وإيميل الباحث الذي تم التسجيل به على موقع المجلة ؛**
- يشار إلى أن **الهوامش والمراجع في نهاية البحث وليست أسفل الصفحة ؛**
- يكتب الباحث **ملخص باللغة العربية واللغة الإنجليزية** للبحث **صفحة واحدة فقط** لكل ملخص ؛
- بالنسبة للبحث باللغة العربية يكتب على برنامج "**word**" ونمط الخط باللغة العربية **"Simplified Arabic"** وحجم الخط **14** ولا يزيد عدد الأسطر في الصفحة الواحدة عن **25** سطر والهوامش والمراجع خط **Simplified Arabic** حجم الخط 12 ؛
- بالنسبة للبحث باللغة الإنجليزية يكتب على برنامج **word** ونمط الخط **Times New Roman** وحجم الخط **13** ولا يزيد عدد الأسطر عن 25 سطر في الصفحة الواحدة والهوامش والمراجع خط **Times New Roman** حجم الخط 11 ؛
- **(Paper)** مقاس الورق **(B5)** 17.6 × 25 سم، (Margins) الهوامش **2.3 سم** يمينًا ويسارًا، **2 سم** أعلى وأسفل الصفحة، ليصبح مقاس البحث فعلي **(الكلام)** 13×21 سم. (Layout) والنسق: (Header) الرأس 1.25 سم، (Footer) تذييل 2.5 سم ؛
- **مواصفات الفقرة للبحث :** بداية الفقرة First Line = 1.27سم، قبل النص= 0.00، بعد النص = 0.00)، تباعد قبل الفقرة = (6pt) تباعد بعد الفقرة = (0pt)، تباعد الفقرات (مفرد single) ؛
- **مواصفات الفقرة للهوامش والمراجع :** يوضع الرقم بين قوسين هلالي مثل : (1)، بداية الفقرة Hanging = 0.6 سم، قبل النص=0.00، بعد النص = 0.00)، تباعد قبل الفقرة = 0.00 تباعد بعد الفقرة = 0.00، تباعد الفقرات (مفرد single) ؛
- **الجداول والأشكال:** يتم وضع الجداول والأشكال إما في صفحات منفصلة أو وسط النص وفقًا لرؤية الباحث، على أن يكون عرض الجدول أو الشكل لا يزيد عن 13.5 سم بأي حال من الأحوال ؛
- يتم التحقق من صحة الإملاء **على مسئولية الباحث** لتفادي الأخطاء في المصطلحات الفنية ؛
- مدة التحكيم 15 يوم على الأكثر، مدة تعديل البحث بعد التحكيم 15 يوم على الأكثر ؛
- يخضع تسلسل نشر البحوث في أعداد المجلة حسب ما تراه هيئة التحرير من ضرورات علمية وفنية ؛
- المجلة غير ملزمة بإعادة البحوث إلى أصحابها سواء نشرت أم لم تنشر ؛
- تعبر البحوث عن آراء أصحابها وليس عن رأي رئيس التحرير وهيئة التحرير ؛
- **رسوم التحكيم للمصريين 650 جنيه، ولغير المصريين 155 دولار ؛**
- **رسوم النشر للصفحة الواحدة للمصريين 25 جنيه، وغير المصريين 12 دولار ؛**
- الباحث المصري يسدد الرسوم بالجنيه المصري (بالفيزا) بمقر المركز (المقيم بالقاهرة)، أو على حساب حكومي رقم : **(9/450/80772/8) بنك مصر** (المقيم خارج القاهرة) ؛
- الباحث غير المصري يسدد الرسوم بالدولار على حساب حكومي رقم : **(EG710001000100000004082175917) (البنك العربي الأفريقي)** ؛
- **استلام إفادة قبول نشر البحث في خلال 15 يوم من تاريخ سداد رسوم النشر مع ضرورة رفع إيصالات السداد على موقع المجلة ؛**
- **المراسلات :** توجه المراسلات الخاصة بالمجلة إلى: merc.director@asu.edu.eg

السيد الدكتور/ مدير مركز بحوث الشرق الأوسط والدراسات المستقبلية، ورئيس تحرير المجلة
جامعة عين شمس– العباسية– القاهرة – ج. م.ع (ص. ب 11566)
للتواصل والاستفسار عن كل ما يخص الموقع : محمول / واتساب: **01555343797 (2+)**
(وحدة النشر merc.pub@asu.edu.eg) (وحدة الدعم الفني technical.supp.mercj2022@gmail.com)

- ترسل الأبحاث من خلال موقع المجلة على بنك المعرفة المصري: **www.mercj.journals.ekb.eg**

ولن يلتفت إلى الأبحاث المرسلة عن طريق آخر.

محتويات العدد 93

عنوان البحث الصفحة

- **الدراسات القانونية LEGAL STUDIES**

1. **التنظيم القانوني لشركة الشخص الواحد..... 3-68**
خالد عتريس عبد العزيز السيد

- **الدراسات التاريخية HISTORICAL STUDIES**

2. **تجسيد فكرة الصراع والحماية على مشاهد أختام العصر السومري القديم(2900-2371ق.م)- نماذج مختارة من المتحف العراقي..... 71-106**
عباس زويد موان

3. **سيدات الطبقة الوسطى فى الدولة القديمة في الجيزة 107-124**
فاطمة إبراهيم نصار

4. **الردة الفردية في المجتمعات الإسلامية إلى نهاية القرن الخامس الهجري/الحادي عشر الميلادي..... 125-164**
غادة كمال السيد أحمد

- **الدراسات الاجتماعية SOCIAL STUDIES**

5. **وسائل الاتصال الحديثة وتأثيراتها على وظائف الاسرة العمانية 167-208**
خليل بن راشد بن حمدان الخائفي

6. **الشائعات وتأثيراتها على أداء المؤسسات الحكومية في المجتمع العماني. 209-244**
المعتصم ناصر عبد الله الهلالي

- **دراسات علم النفس PSYCHOLOGY STUDIES**

7. **الديناميات النفسية لدى المتحول جنسيًّا من ذكر إلى أنثى «دراسة حالة إكلينيكية» 247-286**
وفاء كمال أحمد درويش

- **الدراسات الإعلامية MEDIA STUDIES**

8. **دور الصفحات الاخبارية بمواقع التواصل الاجتماعي تجاه الوعي بالقضايا السياسية لدى الجمهور المصري 289-334**
نرفانا محمد عبد الكريم قاسم

- **الدراسات اللغوية LINGUISTIC STUDIES**

9. **日本古典文学における桜像に関する一考察 – A Study on The Image of Cherry Blossoms in Classical Japanese Literature دراسة صورة زهرة الكرز في الأدب الياباني الكلاسيكي..... 3-36**
هبة الله أبو بكر محمد

10. **文学 — 近代日本から生まれた芥川龍之介の短編小説 Ryūnosuke —作品にみられる葛藤及び心理変化 A study on » in Modern Japan Akutagawa's Short Stories «conflict and psychological change in his literary works قصص ريونوسيكيه أكوتاغاوا القصيرة في اليابان الحديثة «دراسة حول الصراع والتغير النفسي في أعمال الكاتب» 37-68**
مى سعد أحمد حجازي

افتتاحية العدد 93

يسر مركز بحوث الشرق الأوسط والدراسات المستقبلية صدور العدد **(93 – نوفمبر 2023)** من مجلة المركز « **مجلة بحوث الشرق الأوسط** ». هذه المجلة العريقة التي مر على صدورها حوالي 49 عامًا في خدمة البحث العلمي، ويصدر هذا العدد وهو يحمل بين دافتيه عدة دراسات متخصصة: (دراسات قانونية، دراسات تاريخية، دراسات اجتماعية، دراسات علم نفس، دراسات إعلامية ، دراسات لغوية) ويعد البحث العلمي **Scientific Research** حجر الزاوية والركيزة الأساسية في الارتقاء بالمجتمعات لكي تكون في مصاف الدول المتقدمة.

ولذا تَعتَبر الجامعات أن البحث العلمي من أهم أولوياتها لكي تقود مسيرة التطوير والتحديث عن طريق البحث العلمي في المجالات كافة.

ولذا تهدف مجلة بحوث الشرق الأوسط إلى نشر البحوث العلمية الرصينة والمبتكرة في مختلف مجالات الآداب والعلوم الإنسانية واللغات التي تخدم المعرفة الإنسانية.

والمجلة تطبق معايير النشر العلمي المعتمدة من بنك المعرفة المصري وأكاديمية البحث العلمي، مما جعل الباحثين يتسابقون من كافة الجامعات المصرية ومن الجامعات العربية للنشر في المجلة.

وتحرص المجلة على انتقاء الأبحاث العلمية الجادة والرصينة والمبتكرة للنشر في المجلة كإضافة للمكتبة العلمية وتكون دائمًا في مقدمة المجلات العلمية المماثلة. ولذا نعد بالاستمرارية من أجل مزيد من الإبداع والتميز العلمي.

والله من وراء القصد

رئيس التحرير

د. حاتم العبد